

石狩の場所請負人



現在の弁天社

●石狩市 ● 石狩川を語るつどい

慶長9年（1604）に松前藩は、徳川家康から刻印状を拝命して蝦夷地の管理を任せられます。その当時、蝦夷地では米が出来なかつたので松前藩が「商い場」を設けて藩士をあてがい、アイヌとの交易を始めます。18世紀前半からは場所請負制度を実施して、その役目を代表的な商人に委託します。商人はアイヌと交易をして海の幸・山の幸を集めたり、鮭漁や鯛漁をして利益を上げ、そのため、マシケなどの場所の管理を任せられます。

明和2年（1765）には札幌場所（現在の伏古川あたり）も請け負うようになり、次第に力を蓄え大きくなっています。

文化12年（1815）、六代目村山伝兵衛は、石狩十三場所も請け負うことになります。石狩十三場所とは、石狩川上流の樺戸（現在の月形）、島松方面、夕張方面の13の場所を指し、北海道内で最も豊かな場所でした。明治時代に入るまで北海道のサケの漁獲量の半分を扱っていました。

安政5年（1858）、ロシアの南下政策が引き金となり石狩の重要性が増したことや場所制度の不正などがあり、幕府の方針で石狩場所改革が行われ場所請負人制度は廃止されます。石狩十三場所を40数年間

中から運上金を松前藩に納めていました。その代表的な商人の一人が村山伝兵衛でした。初代の村山伝兵衛は能登国（現在の石川県）出身の廻船業者で、元禄期に蝦夷地に渡ってきました。新しい漁法の開発や場所運営などの経営手腕を買われ、ルルモツペ（現在の留萌）をはじめ、ソウヤ、イシカリ、ハママシケ、マシケなどの場所の管理を任せられます。

明和2年（1765）には札幌場所（現在の伏古川あたり）も請け負うようになり、次第に力を蓄え大きくなっています。

昭和18年頃、石狩の町の中心は河口付近にありました。札幌から石狩までいくためには、汽車が開通していないので現在の札幌中央郵便局の隣の亜麻工場（通称ティセン）からバスに乗り、ガタガタ道を揺られて石狩の役場前まで行きます。当時はまだ寂しい街並みでした。

対岸の中心地に渡るために橋がなかったので渡船場まで行き、そこから船で渡らなければなりませんでした。料金は一般の人5銭、公職者は無料だったそうです。

冬はバスが通らなくなり、その代わりとして馬そりが運行されます。八幡から太美まで、馬そりで行き、太美からは札沼線の列車に乗って札幌に行つたのですが、馬そりには湯たんぽが積んでありました。

中から運上金を松前藩に納めていました。その代表的な商人の一人が村山伝兵衛でした。初代の村山伝兵衛は能登国（現在の石川県）出身の廻船業者で、元禄期に蝦夷地に渡ってきました。新しい漁法の開発や場所運営などの経営手腕を買われ、ルルモツペ（現在の留萌）をはじめ、ソウヤ、イシカリ、ハママシケ、マシケなどの場所の管理を任せられます。

石狩の生活

に渡り請け負ってきた村山家は、その後も石狩河口や海浜の鮭場所の経営にあたりましたが、明治41年に石狩の地を後にしました。

●石狩市 ● 石狩川を語るつどい

冬は石狩の本町から、花畔^{ばんなくわ}まで馬そりが唯一の交通手段でしたが、吹雪いたときにはその馬そりも動くことができず、4kmの道のりを歩くこともありました。そのころは長靴も配給制だったのでなかなか手に入らず、藁靴^{わら}を作つて履いていましたが、とても暖かいものだったそうです。

戦時中のこと

ですが、石狩の桟橋で小旗を振つて出征兵士を見送る姿や、江別の軍需工場で働く学生たちや札幌の紡績工場に働きに行く若者たちを見送る悲しい光景も見られました。



石狩川は雨が降つて増水すると大量の流木が流れています。その流木や泥炭^{でいたん}を干して冬の燃料にしていました。

冬は川が凍つてしまい船が動けないので、渡船場の人たちが流れてくる氷を止めて、切つた柳の枝を敷いて冰橋^{こおりばし}をつくり、板を乗せて石狩川を渡りました。

空襲^{くうしゅう}が石狩を襲つたときに、学校にいた先生たちはまだ未完成の空が見える防空壕^{ぼうくうごう}に避難^{ひなん}し、機銃^{きじゆう}の音を震^{ふる}えて聞いていました。

工場では飛行機を作つていたのですが、材料には鉄がないためベニア板を丸めて作つていたそうです。

昔は冬はチカガ、春は白魚が引き網でいつ

ぱい獲れ、夏になると桟橋の近くにある灯台のそばに小屋を作つて引き網で小魚を獲り、その魚を釜で煮た後、干して肥料を作つていました。待ちかねたように札幌などからの農家の人たちができたてを買いにきました。

昭和29年、多くの被害をもたらした洞爺丸台風のときには、危険を感じたサケたちが背びれを出して広い石狩川の川幅いっぱいになるほど大量に泳いでいたそうです。みんなわれ先にと競つてサケを獲りました。

石狩川は雨が降つて増水すると大量の流木が流れています。その流木や泥炭^{でいたん}を干して冬の燃料にしていました。

花畔のほうから歩いて歩いて帰つてきた生徒たちを見て、渡船場の人たちは良く帰つてくれたと言つて、時間外にもかかわらず渡船を出して渡してくれたそうです。だらけでした。町はすごい火事になつていました。高等科の男子生徒たちは花畔に田んぼや畠の草取りなどの手助けにいついていたのですがなかなか帰つできません。連絡もつかず心配していたところ、夜になつてようやく帰つきました。



石狩渡船

江別の成り立ち

●江別市 ● 石狩川を語る

松浦武四郎の蝦夷各地の調査後、箱館奉行・堀利熙に随行して安政4年(1857)4月から9月にかけ蝦夷地と樺太を探索してその後「北入記」を記した、仙台藩藩士・玉虫左太夫が江別を訪れ、高い山に登り四方が平らな江別を眺めて、「将来は非常に大事な場所になるだろう」と文章に残しています。

明治4年に宮城県から21戸76人が対雁に入植しますが、開墾がうまくいかず換地を願い出て雁来村へ移住してしまいます。その後江別・対雁を通りかかった箱館戦争(五稜郭の戦い)で有名な榎本武揚は現在、榎本牧場のあるその場所を、さらに榎本の部下である大鳥圭介もそれにならない他の土地を買い上げていきました。炭鉱が発見され、重要な場所であることに気付いて開拓使が着目したのはそれから後のことでした。明治政府は屯田兵入植のためという理由で、その土地を買い戻すことになったのです。

こうして明治11年、江別に屯田兵10戸56人が入植しましたが、すでに対雁には樺太



大川通

千歳川と石狩川の合流点にできた三角地の目抜き通りが大川通で、川に囲まれたその地形のためそれまで数多くの水害に悩まされてきました。当時、川の近くに暮らすということは川が氾濫する危険もありますが、また川の近くでなければ受けられない恩恵もありました。

大川通の対岸には白壁の倉庫が2、3棟建つていて、そこにはいろいろなものを積んだ船が着きます。春になるとニシン船が石狩

陸路の鉄道には弁慶号が走り、石狩川には神威丸。陸蒸気と川蒸気がここ江別でドッキングしたことで交通の重要な拠点となりました。屯田兵が開拓して町をつくる前に、たくさんの人々が集まってきて出来ていった人たちに雑穀の倉庫が開放されます。子ども

のが江別の町です。

明治17年には外輪船の上川丸が石狩・樺戸間の運航を開始、江別は中継地としてさらに発展していきます。その後、大正5年に江別町に昇格。昭和29年には市制が施行され江別市となりました。

●江別市 ● 石狩川を語るつどい



川に面して水天宮が建っていました。水難事故で犠牲になつた人たちをお祀りするためです。水天宮のお祭りは大変な賑わいでした。物を売るお店が建ち並び屋台が出て、夜になると白い大きな布を張つて映画も上映しました。

また大川通には呉服屋さんや雑貨屋さんがひしめき合い、鍛冶屋さん、豆腐屋さん、風呂屋さんもありました。狭い三角地でしたが何でも揃う便利な町だったのです。

川には木の橋がかかっていましたが、木が腐つていて馬が通るとヒズメで穴が開いてしまい、すぐには修理されないので、夜に渡るのは危険でした。春は雪解けの水が固まりになつてどんどん流れてきて、橋桁にドーン

たちはおばあさんなどと一緒に出かけ、落ちている豆などを拾つたのです。川に面して水天宮が建つていました。水難事故で犠牲になつた人たちをお祀りするためです。水天宮のお祭りは大変な賑わいでした。物を売るお店が建ち並び屋台が出て、夜になると白い大きな布を張つて映画も上映しました。

たちはおばあさんなどと一緒に出かけ、落ちている豆などを拾つたのです。川に面して水天宮が建つていました。水難事故で犠牲になつた人たちをお祀りするためです。水天宮のお祭りは大変な賑わいでした。物を売るお店が建ち並び屋台が出て、夜になると白い大きな布を張つて映画も上映しました。

川の水はきれいに澄んでいて、夜は製紙工場の明かりが水面に映り、空には満天の星がきらめいていました。夏に花火大会があるときには対岸からも親子揃つて江別橋を渡り、みんなが大川通に集まり花火を眺めたそうです。

むかしの石狩川には海からたくさんのかが海上していました。1、2回網を仕掛けると石油缶にいっぱいたまるくらい採れ、ときどきヤツメウナギもかかりました。

川舟



人が、大川通にあつた治水事務所に一時勤めた後、自分で小屋を建て船大工として独立しました。

主として注文は農家からのものでした。穀物などを町まで運ぶための小さな川舟が必要だったのです。時には石狩の海船の修理も請けていたようです。この人は大変器用な人で自宅や頼まれた家を建てたり、川舟のほかにも椅子や机などを作つていて了す。その技術は、釘は1本も使わずにすべて木と木を組み合わせた作った素晴らしいものでした。

その造船所で修行を積み船大工をしてい

ました。大川通りで合流する千歳川の上流に堀川造船所があり、そこでは川舟をたくさん作っていました。だんだん時代が変われば川舟を使う人が少なくなると造船所は経営が成り立たなくなり、やがて閉鎖してしまいます。

むかし江別には多くの川舟が行き来していました。大川通りで合流する千歳川の上流に堀川造船所があり、そこでは川舟をたくさん作っていました。だんだん時代が変われば川舟を使う人が少くなると造船所は経営が成り立たなくなり、やがて閉鎖してしまいます。

北村の水害

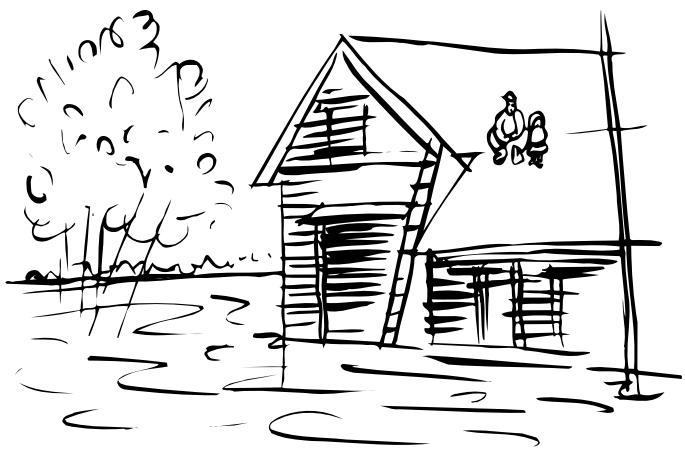
明治16年、札幌からやつてきた滝本嘉助が現在の月形にあつた樺戸集治監の看守を努めるため、美唄達布に入植して北村の初めての定住者となりました。これが北村の始まりでした。

明治27年に開拓の功労者、北村雄治が山梨から入植、北村農場を開設します。北村雄治はその後この村のために数多くの貢献をしました。その功労に感謝して村の名前を「北村」と付けました。

北村は、石狩川を原点としながら開墾され、石狩川の恩恵なしでは北村の歴史を語ることができません。

しかしその一方、北村の歴史は水害の歴史と言わせていて、北村の子供達は小学校、中学校では必ず教えられてきました。

明治31年に全道を襲った未曾有の大水害がありこの時の死者は全道で100名以上になりました。明治42年にも大洪水が発生。この水害を契機に翌年から北海道第一期拓殖計画が策定されました。昭和7年の8月から9月にかけて石狩川が大氾濫して、



川の恩恵

昭和26年ごろ、春になると何月何日に北村の何々地区には、ニシンを積んだ船が入るので何箱か注文するように、と農協や役場から連絡が来ます。まだ雪が積もつてるので、みんな馬そりで船着場へ行きます。いっぱいにニシンを積んだ船から箱ごと買ります。当時は交通の便は悪いのですが、石

狩川からの船は浜で獲ったその日のうちに北村に着くので新鮮そのものでした。北村の人たちはそのまま焼いて食べたり、ミガキニシンやいづしや切り込みにしたり、白子は乾燥させて保存し、数の子は保存食にしま

修が行われ、ようやく現在のおだやかな石狩川になりました。

北村は、明治33年に岩見沢から分村して出来ましたが、現在は栗沢町とともに岩見沢市に編入合併しました。

●岩見沢市 ● 石狩川を語るつどい

近くの小川でも魚がたくさん釣れました
が、大雨が降ると魚とりの名人がいて投網(とあみ)で
もしたかのように一斗缶(いっとうかん)にいっぱいの魚をくれ
ました。それを炭火で焼いてから干します。
それを保存しておいて麺類などのダシに使い
ます。鱗(うろこ)と頭と尻尾を取つてから包丁でバン
バン叩きすり身にしてつなぎも入れずに蒲鉾(かまぼこ)
にして食べました。

当時の石狩川は今のようにまつすぐでは
なく、クネクネと蛇行(だこう)していたので、曲がつて
いる外側はえぐれ、内側は砂利などが堆積(たいせき)
します。内側にできた淀みには、魚がいっぱい
いました。

その魚を釣つて、食べて、そして石狩川に感謝
する。まさに童謡唱歌にある「小鮒釣り
し、かの川…」の世界がありました。

秋のある日、朝早く道路のすぐ横の川の
あちこちで大きな魚がバンバン跳ねていまし
た。それはサケでした。大人たちは密漁(みつりよ)もお
構いなしに手づかみで取つていたのどかな時
代でした。

このころはまだ耕耘機(こううんき)やトラクターがなか
つたので非常に静かでしたが、川を時々蒸氣(じょうき)
と見えられます。

した。

近くの小川でも魚がたくさん釣れました
が、大雨が降ると魚とりの名人がいて投網(とあみ)で
もしたかのように一斗缶(いっとうかん)にいっぱいの魚をくれ
ました。それを炭火で焼いてから干します。
それを保存しておいて麺類などのダシに使い
ます。鱗(うろこ)と頭と尻尾を取つてから包丁でバン
バン叩きすり身にしてつなぎも入れずに蒲鉾(かまぼこ)
にして食べました。

当時は橋がかかつてない地域が多く、夏
は渡船(とせん)で川を渡り、冬は氷橋が作られるの
で、結氷(けいひょう)した川の上を馬そりで渡りました。
馬は自然に生えている草や干した草が燃
料なのです。馬そりは現代の車のようにガソ
リンを一切使わないエコロジーな乗り物だった
のです。

境界線と幌向波止場

明治33年に岩見沢と北村と栗沢の分村
が決まりました。そこで境界をどこにするべ
きか議論されました。一般的に境界線を引
く場合は、川に沿うか、山や沢の稜線(りょうせん)で区分
するのが普通です。

しかしこの一帯はすべて湿地帯で、境界と
する目安がなにもありませんでした。川がある
ようではなく、山もなければ沢もありません、
せん、仕方なく一直線に境界線を引いたもの
と考えられます。



また岩見沢と石狩川の関わりを調べてい
ると、地図上の2カ所に数字が書かれてい
ました。調査の結果一つは、道路を作るとき
の測量点で、もう一つは岸高(きし)だかということが分
かりました。岸高とは、川の水面から岸ま
での距離です。そのような理由から岸の高
さを調べた幌向のこの地点に、港があつたこ
とが推測できます。石狩川を行き来する船
の寄港地で、「幌向波止場」と呼ばれていま
した。

上川仮道路と美唄のはじまり

なりました。

明治19年に北海道庁が設置され、ようやく北海道の本格的な開発が始まりました。道央、道北、道東を開拓するために中央道路の開削が必要となり、最初に現在の国道12号線の元となる上川仮道路と、月形の樺戸監獄と空知監獄を結ぶ月形樺戸道路を計画しました。樺戸監獄と空知監獄の囚人50人を連れて、石狩川を船で滻川付近まで

上り、そこから旭川まで幅1・8mの道路を

つくる計画でした。その年の6月に旭川まで、8月には下つて市来知（現在の三笠）まで、およそ90kmがわずか90日間で完成しました。

明治23年、上川仮道路に沿つて、北炭鉄道空知線が開通したことにより移住者が増加していく、美唄の始まりである沼貝村ができました。

松浦武四郎も「ビバイは川貝のことなり」と記していますが、名前の由来は、アイヌ語で「カラス貝の多く棲む沼」を意味する「ピ

パ・オ・イ」とされています。

明治24年には100戸の屯田兵が入植し、村の戸数は230戸、人口1,087人と



上川仮道路と石狩川との間は、広大な原野と深い泥炭地で、戦後に客土（他の場所から性質の違う土を持ってくること）による土地改良が行われるまでは開墾が難しい場所とされていました。

中村地区の生活用水

石狩川畔の入植地の中村地区は、明治27年の中村農場の開設から始まります。石狩川の水はとてもきれいで、夏の渴水期に井戸の水が涸れたときには河原に行って飲み水を汲んだり、洗濯物をすすぎました。「おばあさんは川に洗濯に…」というまるで昔話のような生活でした。

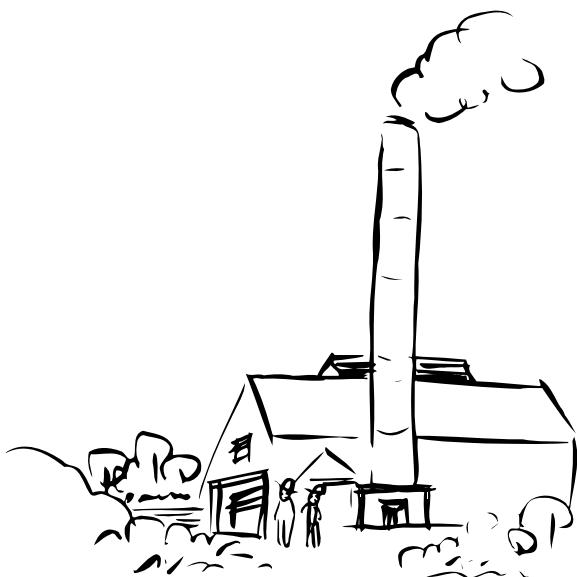
当時、石狩川は夏になると川の水が少なくて、河原が広くなるので、子供たちはいろいろな遊びをしたり、対岸まで泳いで渡つたりしました。

川向かいに、お不動さんがあり、お祭りのときに催し物のお相撲があると対岸の人たちは、渡し船を利用して見にいったそうです。

もちろん入植のための陸路は十分に確保されていません。そこで通り道となつたのが石狩川です。ほとんどの入植者は、江別方面から船で遡つてきました。石狩川は重要な交通路として、開拓民の生活の道路・通路としてかかせないものでした。

●美唄市● 石狩川を語るつどい

中村地区では明治36年に水稻の試作に成功し、その後明治45年に中村農場の支配人だった大塚という人が北海道で初めて、蒸気機関を使い機械によつて石狩川から水を汲み揚げ水田に水を引きました。川の水位が下がつても取水できるこの方法は当時では「定期的な」とでした。



中村には「鶏飯」という郷土料理があります。各家庭でそれぞれ長い間工夫を重ね、培つてきた料理です。入植当時、中村の名前の中村農場の創始者・中村トヨジロウという人が、入植者の動物性タンパクの

補給のために「ワトリを飼うことを勧めました。卵を生まなくなつた後は、ご飯と一緒に炊き込んだり、野菜などと炊き込んでおかずになりました。苦しい生活の中から生まれた開拓民の知恵だつたのです。いまでは町内会、生産組合、農協の婦人部などと協力して「鶏飯エプロンクラブ・里の味」をつくり、商品開発や普及販売活動をしています。

美浦渡船

当時の子供たちには石狩川がプールの代わりでした。夏の渴水で広くなつた砂利の河原は子供たちにとっては格好の遊び場でした。対岸まで行くときに利用したのが美浦渡船です。中村から浦臼まで札幌内の特産物やスイカ、メロンを買いに行つたり、浦臼から中村に買い物に行くのに利用されました。昭和31、32年ごろ、アイスキャンデーが食べたくなると飼つている「ワトリ」の生んだばかりの卵をかかえて、アイスキャンデーと交換しに行つたという物々交換のエピソードもありました。



昭和42年頃の美浦渡船

大正5年から始まつた美浦渡船は美唄と浦臼の人たちの架け橋でした。

近年一度休止が決定されましたが、続けて欲しいと数多くの人々の声が集まり、船頭の国田さんによつて北海道で唯一の渡船は今でも運行を続けています。水面が近く、川から陸を見るという経験は珍しく貴重なものです。

北海道旅行に来た観光客の人たちが感動して帰つてくれるのが嬉しい、と国田さんは顔をほころばせます。

行く人、帰る人、単なる移動の道具としてだけではなく、ひとつ文化として北海道で最後に残された渡船の今後を見守つて行きたいと思います。

空知太

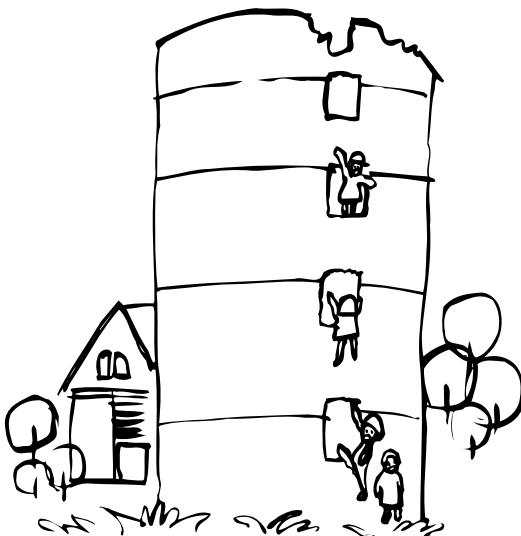
空知太は空知川と石狩川が合流するところです。明治以前の安政4年(1857)、松浦武四郎が石狩川踏査のおりに、空知太から空知川を遡りました。その時、武四郎は空知太の高台から周辺を眺めたと伝わっています。その後、榎本武揚も空知川沿岸を調査しています。

また、空知太は明治19年に上川仮道路、20年に上川道路が開通してからは、重要な渡し場となり、そこに三浦米蔵が渡船場を開設しました。この道路の開削は空知太を起点に北と南へ向かって行われましたが、なんと90kmの距離をたった90日で開削したのです。

さらに明治22年には駅逓ができました。そして明治25年に砂川から南空知太間に待望の鉄道が開通します。

しかし空知太に電気が配給されたのは昭和30年くらいのことです、それまで多くの人々は電気のかわりに、ランプでの生活を余儀なくされていました。

空知太には明治37年ごろからホルスタイン



牧場には、当時では珍しいコンクリートのサイロがありました。いまでもどうやって作る事ができたのか分かつていません。平成6年までの長い間形を保つていて、屋根の壊れたサイロは子供達の格好の遊び場でした。その牧場で飼われていた牛たちに水を飲ませるために、国道12号線を下つて空知川まで連れていきました。

しかし空知太の肥沃なその場所にあつた300町歩もの牧場や民家の多くが度重なる90kmの距離をたった90日で開削したのです。

砂利を取り去った穴に水がたまつて、ブルのようになつたので、そこで泳いだりしました。灌漑溝や穴では泳いではいけないと言わっていても、子供たちは「プール、プール」といって遊んでいたそうです。冬には兵舎の跡地がなだらかなスキーのスロープでしたが、慣れて物足りなくなるとやんちゃな子供は石狩川に向かって滑るのです。ゴールは凍つた石

を飼っている酪農社という牧場があり、最初は滝川で酪農を始めその後、砂川の空知太に牧場ごと移住してきました。その牧場の近辺だけは電気がありました。

牧場には、当時では珍しいコンクリートのサイロがありました。いまでもどうやって作る事ができたのか分かつていません。平成6年までの長い間形を保つていて、屋根の壊れたサイロは子供達の格好の遊び場でした。その牧場で飼われていた牛たちに水を飲ませるために、国道12号線を下つて空知川まで連れていきました。

しかし空知太の肥沃なその場所にあつた300町歩もの牧場や民家の多くが度重なる暴れると恐ろしい川ですが、石狩川では、子どもたちがカジカやウグイ、ドジョウなどの魚を釣つたり、網やドウでカニをとつて遊んでいました。川の縁に餌をつくる会社がつて餌のかす汁が流れてくると大量の魚が集まつてしていました。

砂利を取り去った穴に水がたまつて、ブルのようになつたので、そこで泳いだりしました。灌漑溝や穴では泳いではいけないと言わっていても、子供たちは「プール、プール」といって遊んでいたそうです。冬には兵舎の跡地がなだらかなスキーのスロープでしたが、慣れて物足りなくなるとやんちゃな子供は石狩川に向かって滑るのです。ゴールは凍つた石

木材の流送

明治24年頃から石狩川では本格的に木材の流送が始まりました。

毎年4月の中ごろに、川が春の雪解け水でいっぱいになるのを待つて木材を流送するのです。網場と呼ばれる貯木場が山の方にあり、木材流送のときには、親方の指示で「いかだ」が組されました。空知川上流であれば野花南、石狩川上流なら鷹泊、そして雨竜川方面などに出かけ、いかだを組んで満水になるのを待ちます。木材は雪解けの水とともに一気に川を下り、集積場所に送られてきます。普通の年は5月いっぱいで終わりますが、6月中旬くらいまで作業が続くこともありました。

砂川は、駅が川に近く、集積する場所が豊富だったことから流送にとても便利でした。砂川は石狩川の重要な木材流送の拠点となりました。

その作業のために大勢の人が砂川に入り、町には商店や旅館、料理屋、飲食店がどんどん増えて活況を呈していました。

ジャリンバ

砂川の「冬のフェスティバル」の会場となるのが旧石狩川のオアシスパークや遊水地です。「ジャリンバ」とは未来の砂川を子供達に託すという考え方から生まれたキャラクターの愛称です。

ジャリンバの誕生も「冬のフェスティバル」でした。イベントの中に仮装ミニスキー大会があり、仮装してミニスキーを履いて滑りパフォーマンスをして審査を受けるというものです。

一人の青年がお化けのような衣装を着て登場しました。ミニスキーはうまく滑ることが難しく、それが大会の狙いなのですが、七転八倒しながら中腹まで来た青年が「ジャリヤリジャリンバー、ジャリジャリジャリンバー」と叫び、バレンタインデーが近いこともあってチョコレートをまいたのです。それが拍手喝采を受けました。「ジャリンバ」とはどういう意味なのかと青年に尋ねると、砂川は砂利場で栄えた町だからと答え、それ以来ネーミングとしてイベントで使うようになりました。ジャリンバには、いろいろな役割があります

が、初詣や冬のフェスティバルなどで頂いた賽



ジャリンバ文庫の贈呈

錢を貯めて図書館に「ジャリンバ文庫」を寄贈したり、ジャリンバまんじゅうを持つて保育園を訪問したり、「ジャリンバの森の造成」をするすめています。市民ひとりひとりが共通の理念を持ち、自然環境の保全などに一緒に取り組む活動です。森に保水力のある木を植え、麓までの環境を整え、きれいになつた水を石狩川に返すという構想です。

平成10年に正式に「ジャリンバ」の会を設立し、CDやダンスも考案しました。

鉄橋通り

滝川に函館本線が開通したのは明治31年のことでした。滝川の市街と新十津川へ行く道路の間を函館本線が通っていますが、沿線沿いの石狩川を跨いで石狩川橋があり、そのあたり一帯を人々は鉄橋通りといいました。当時の滝川で一番賑やかな広小路とは日と鼻の先なのです。が、踏切で区切られているために少し場末というか番地もなく田舎とう感じでした。

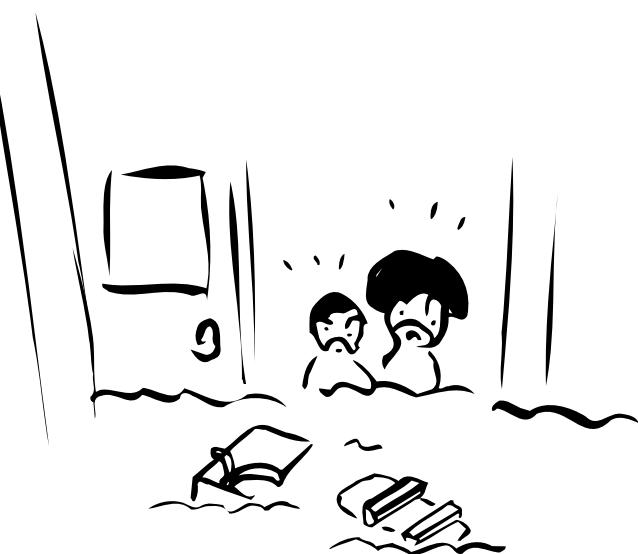
陸の交通はあまり整備されていませんでしたが、川が近くまで迫つていて、船を寄せるのに便利だったため、舟運が盛んでした。波止場と呼んでいた川の港では、あちこちで荷物を積んだり降ろしたりしていました。

その時代の石狩川はくねくねと曲がつていて、今はその一部が三日月湖になつて残っています。川が近かつたので、鉄橋通りの子どもたちは夏の暑い時期になると泳いだり、遊んだりしていました。しかし、石狩川が氾濫するすると川のそばの鉄橋通りは土地が低いので真つ先に洪水に襲われました。

夜中に「水害だから起きなさい。」と言わ

れ眠い目をこすりながら荷物を抱えて玄関に出ると、いつも履いている下駄がぽかぽかと浮いていました。あたり一面の水田が水没して真っ白な湖みたいに見えました。ようやく高い位置にある踏切の向こうの親戚の家まで避難したのです。こんなことが5、6年の間に3回くらいありました。

七夕になると鉄橋通りの人たちは石狩川、滝川の市街の人たちは空知川の川原から柳を取ってきて、それぞれの家で短冊や千代紙を吊した手作りの七夕飾りを家の前に立て、



対岸には、奈良県の十津川村からの入植者によつて新十津川の町が出来ていきました。秋には十津川村から持つて來た御神体を祀つてある玉木神社(現在の新十津川神社)のお祭りがあり、近隣から人が集まり大変な賑わいでした。いろいろな物が売られていましたが、今のワゴンの代わりに当時は板戸に物を並べて売っていました。

石狩川で捕れた川ガニも売られていて、大変美味しくて、一匹が5銭から20銭くらいだったそうです。石狩川の橋のたもとにカニ網を仕掛けに行くこともあるくらいいっぱいカニが採れました。

七夕がすむと川に流しました。お盆やお彼岸に仏様に供えたものも、お花もみんな川に流すのが当時の風習でしたが、川が汚れるということで自然とそういう風習もなくなつていきました。

鉄橋通りは当時、井戸からポンプで水を汲み上げ、生活用水として使っていました。春になると雪解け水が地下水に入り込んで茶色に濁りますが、これも自然の理だと思って、その水を沸かして飲んだり、ご飯を炊いたりしていました。

石狩川のいきものたち

現在の石狩川水系には多くの魚がいます。調査では50種類前後の魚がいることが分かります。外来種が思つてはいるよりも多く入つてきています。

外で語るつどい

外来種の中で代表的なのがナマズです。それと雷魚、これらはおよそ80年くらい前に、食用として朝鮮半島から奈良県などに輸入されたものです。雷魚は大きくなると1mくらいまで成長して、歯が鋭く魚食性が大変強く、性格もどう猛で場合によつては人間も襲います。それとアリゲーターガーというアメリカ・ミシシッピー川上流が原産のワニに似た魚がいます。これなど30年も生きて、4mまで成長します。これも魚食性が強くほかの魚を食べ尽くすと石狩川にはアリゲーターガーだけがウヨウヨ泳いでいることにもなりかねません。

魚だけではなく植物も帰化植物が川原にどんどん繁殖し、古来からある葦やヨシが駆逐されつづります。

●滝川市 ● 石狩川

石狩川のチョウザメは残念ながら今はいません。江戸や明治時代の初期にはたくさんいました。平成5年と平成16年に石狩川の河口で1匹捕獲されています。

チョウザメは、サメとは別の種類と考えられていて、川に遡上して産卵し、その後海へ帰るものと、一生を川で暮らすアムールチョウザメやコチョウザメなどがいます。寿命は30年くらいいと非常に長く、大型になります。世界中で20数種いますが、大きいものでは体長8m、体重100kg、寿命は100年という記録もあります。

外で語るつどい

その昔、日本では北海道、東北の沿岸でよく見かけられ、石狩川、天塩川、釧路川、十勝川などにもいました。滝川にも、チョウザメがいっぱいいました。たくさんの地名に残つていることからもそのことが分かります。江部乙はアイヌ語で「ユベオツ」、サメのいるところという意味です。また、空知太から赤平の間にも「サメブチ」という地名が残っています。

チョウザメの卵は「キャビア」として珍重されるため乱獲や、河畔林の伐採によって土砂が流れ込む河川の汚れなどで次第にその数を減らしていきます。

松浦武四郎の「石狩日誌」にも登場する

また、川の氾濫を抑えるためにたくさんのはんらん堤防も造られました。それはチョウザメが川をさかのぼを遡つて、産卵をするためには好ましい状態ではありませんでした。チョウザメが棲んでいたのは人間の手が加えられていない原始河川でした。川幅が広く、大水になると流れが変わり、河畔林が生い茂つてはいるそのような自然の中での生活です。

現在「川の科学館」ではオオチョウザメとコチョウザメの人工交配種のベステルというチョウザメが飼育されています。滝川「川の科学館」は、「科学の眼で水を探り、川を知る」を目標に平成2年に完成しました。石狩川にすむ多くの淡水魚が飼育されている水族館などのほか、水の力や原理を遊びながら学べる体験コーナーなどがあり、川の教室などの勉強会も行われています。



内園での川とくらし

昭和20年すぎ、石狩川河畔の内園には小学校はありましたが、中学校は地元にはなく、毎日納内橋を渡つて川向こうの納内中学へ歩いて通学していました。その頃、どの学校にもプールはなく、夏には石狩川がプール代わりの遊び場になります。通学帰りには家へ戻らず、そのまま石狩川へ降りて遊んでいました。納内橋の上流にある小さな中島がみんなの秘密基地みたいなものでした。

こには砂場があつたり、森があつたり、その中島に渡つて遊びました。橋の下、橋脚は特に流れが穏やかで絶好の遊び場でした。

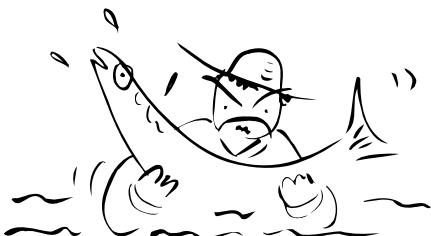
石狩川は、5年から10年に一度大きな水害をもたらしましたが、水が引いた後は楽しいことが待っています。それは大きな窪みに水が残り、そこに魚が残されているのでした。コイ、ウグイはもちろんフナ、時には金魚まで取り残されて、それを捕まえるというかすくうのが非常に楽しみでした。

内園地区は石狩川からポンプアップして用

地に通水しているのですが、水害が起つてくるとすぐに水門をおろして、水を止めま

す。水害の後、掃除するとこの中に魚が大量に入つていて水を汲み出すことができません。そこで、最初に魚を何杯もすくい出して、その後掃除をしたこともあります。平成6年には、70~80cmのコイが田んぼに2匹取り残されました。

石狩川では釣りをする人がたくさんいました。秋になると石狩川に秋味(サケ)がいっぱい上ってきます。川に入った人たちが泳いでいる秋味を必死になつて捕まえていたそうです。また、今は全然姿を見かけなくなりましたが、昭和20年、30年ぐらいにはカラス貝が川中にいて、いろいろな魚とともに、遊び道具のひとつでした。



ナイダイブから内園へ

内園は一部が水田で残りのほとんどが畑です。菜の花の栽培が非常に盛んに行われていて、橋から見るとまるで花畑のような景色でした。松浦武四郎の「石狩日誌」にも出てくるナイダイブがそれまで地域の名前でしたが、昭和16年、音江町の地名変更のときに、ナイダイブ(内大部)と園生(えんせい)花畑の頭の文字をとり内園という現在の地名に変わりました。

明治26年には、ここにマッチ軸大工場と言

で水橋を渡つてきて川向こうに嫁いでいたのです。ですが、その水橋がものの1週間もしないうちに落ちてしまつたそうです。もう少し遅かつたらこの地に来れなかつたのではないかと話しています。

納内橋はその翌年の昭和7年につくられていますが、旭川の旭橋として使用されています。ものを解体して再利用されたそうです。その後40年近くも納内橋は内園の人々に利用され、愛されてきました。

●深川市 ● 石狩川を語る

昭和6年3月にある女性が嫁いだときは、まだ納内橋がかかっていました。それ

●深川市 ● 石狩川を語るつどい

われる工場群が深川で初めてでき、従業員も500人ほどいて、宅地もどんどん増えていきます。また深川最初の工業と言われる豆腐製造もこの地で行われたと伝えられています。しかしマツチ軸工場は日清戦争の余波や大火などで移転や閉鎖が続き、明治32年頃には姿を消してしまいます。

農業の開拓が始まったのは明治31年ごろですが、このころは畑作が主体で、一時期はリンゴの栽培も盛んでした。

水田は明治41年、10戸の農家が、石狩川下流の出会い沢に用水をつくり約20町歩の開田をしました。ちょうどこの頃北海道拓殖銀行法ができて、土地を抵当に融資が受けられるようになりました。内園でも、一部の地区では稻づくりをしていましたが、昭和35年ごろ、神竜土地改良区に加盟し、石狩川からポンプアップで水を引くようになり造田は本格化していきます。

また北空知頭首工から上流は無堤地区でするので、河川敷を水稻、畑地、草地などに利用しています。石狩川に面した農家は石狩川とは深い接点を持つていて、今日の深川にとって石狩川は大切な宝なのです。

石狩川下覧櫂

石狩川下覧櫂は、深川市から月形町まで1泊2日の川下りをメイン行事に、流域市町村をはじめ深川から月形までの河川清掃や石狩川に関するイベント開催など、いろいろな地域の子供たちとの交流をしながら石狩川に親しみ、石狩川と遊ぼうという趣旨の会です。

つい最近まで深川市の不法投棄のゴミが多く、他の地域の方からの厳しい指摘があり、

清掃活動を続けてようやく最下部の月形町までたどりついたところです。水辺の環境をみんなで考え、川での遊び方、農業と川の関わりなどを学びながら、より良いかたちで次の世代に石狩川を残していくために今で起きる限りのことを行っています。

川にはもちろん危険もありますが、子供のうちから水と接して安全対策を学ぶことで危険は回避できます。そして川は遊び場としてだけではなく、私たちの生活にとってかけがえのない大切な資源であることを知つてほしいのです。

その昔は親水などという言葉自体ありま

せんでした。本来子供たちは、川でいろいろな遊びをしながらしながら、水・川辺に自然と興味を持つていくものです。

石狩川の中からの景色を見たことがある人は少ないと思います。意外と簡単な装備で石狩川は安全に入れるのです。海とは違い右岸・左岸があつて柳の枝につかまればどこからでも上がつてることができます。これからも子供たちが川と触れ合う機会をたくさんつくっていきます。



アイヌの暮らし

●旭川市 ●石狩川を語つどい

明治19年に上川にやつてきた高橋不二雄が上川アイヌの集落をスケッチした絵が残されています。忠別川が石狩川に合流する地点で、忠別太（現在の亀吉）といわれたあたりの1軒のアイヌの家が描かれています。住居の手前と後ろの柵にはサケが干してあり、右手には熊の檻があります。これはクマ送りをするためにクマを飼っていた檻です。

住居は1軒しか描かれていませんが、上川アイヌの集落は1、2軒が普通で、10軒くらいもあると大集落なのです。アイヌの村はいつも川のそばにあり、川が氾濫するとひとたまりもないような危険な場所にありました。上川アイヌの家では5～6匹ほどの犬を飼い、川に入りサケをくわえてくるように訓練します。この5～6匹の犬でひとシーザンに2千本くらいのサケを捕りました。一人暮らしのおばあさんでも600本くらいは捕っていたそうです。おそらく1世帯当たり数千本、時には1万本くらいのサケを捕つてたと思われます。当時の石狩川はサケが非常に豊富だったのです。

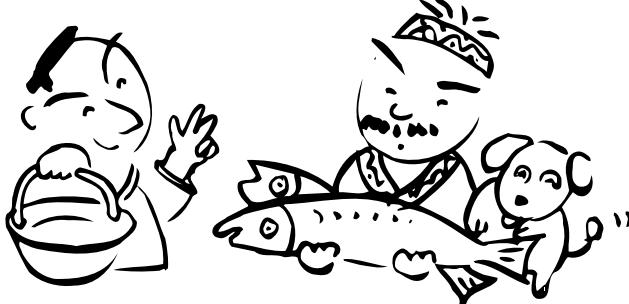
上川アイヌがこれほど捕っていたのには理由があり、食料としてだけではなく、和人と交易の手段でした。例えば鉄の鍋を手に入れの場合、干したサケが1000本くらい必要としました。

上川でサケが上がつていた主な川は石狩川と忠別川でした。松浦武四郎も上川アイヌがサケを捕っている様子を絵に残していますが、むかし旭川は湧き水が豊富な町でその湧水地帯にサケは産卵のため遡上します。その場所が3カ所あり、上川アイヌは全体で三百人くらいでした。

が三つに分かれて、わき水が豊富な所に暮らしていました。

上川アイヌは産卵場を占めて徹底して鮭漁をしていました。

上川アイヌが集落にする場所は、交易を活発に行うために丸木舟の運航に都合が良い場所であることと、サケの産卵



場所に近いことが欠かせない条件でした。

石狩川水系にはサケの一大産卵場所が3つあり、札幌の市街地と千歳川の上流域と上川盆地です。縄文時代にはサケが遡上しない川にも集落はありましたが、10世紀以降、サケがいない川の集落は消えていき、無人の原野となっています。それは10世紀以降、活発になつていく交易にはサケが必要だったと考えられます。

上川アイヌは丸木舟を使い分けていて、石狩川の河口から神居古潭までは10mくらいもある大きなものを使い、その上流では舳先の上がつた急流用の小さな物に乗り換えて使っていました。上川アイヌの村がある上限と丸木舟の遡航限界が見事に一致していることが分かっています。

永山の稻作

永山地区には、明治24年に屯田兵が入植しました。その当時は稲作は不可能でしたが、研究開発の末、永山でも米が作れるようになりました。

●旭川市● 石狩川を語るつどい



明治28年には、屯田兵屋に火事が頻発したので、防火用水路を掘削するため石狩川の水を引いて当麻宇園別を迂回して、国道39号線沿いに用水路をつくりました。その後、屯田兵の間に造田熱が急速に高まりました。自分の水田に水を引くための灌漑溝を作り、次々と土地を開拓し、水田が増えていきました。

昭和20年ごろには米作りが永山の基幹産業になつていきます。そのころの水田面積は約2千町歩（1町歩は、約100m四方）、水路面積170町歩、道路用地200町歩です。川の恩恵が米作りや人々の暮らしを支えてきたことがわかります。

また旭川は材木の町でもあり、大きな木の輸送は石狩川などを利用して流送していました。冬は川の水をせきとめて、夏に使うための氷づくりが農家の人々の副業として生活を潤しました。

明治28年には、屯田兵屋に火事が頻発したので、防火用水路を掘削するため石狩川の水を引いて当麻宇園別を迂回して、国道39号線沿いに用水路をつくりました。その後、屯田兵の間に造田熱が急速に高まりました。自分の水田に水を引くための灌漑溝を作り、次々と土地を開拓し、水田が増えていきました。

昭和20年ごろには米作りが永山の基幹産業になつていきます。そのころの水田面積は約2千町歩（1町歩は、約100m四方）、水路面積170町歩、道路用地200町歩です。川の恩恵が米作りや人々の暮らしを支えてきたことがわかります。

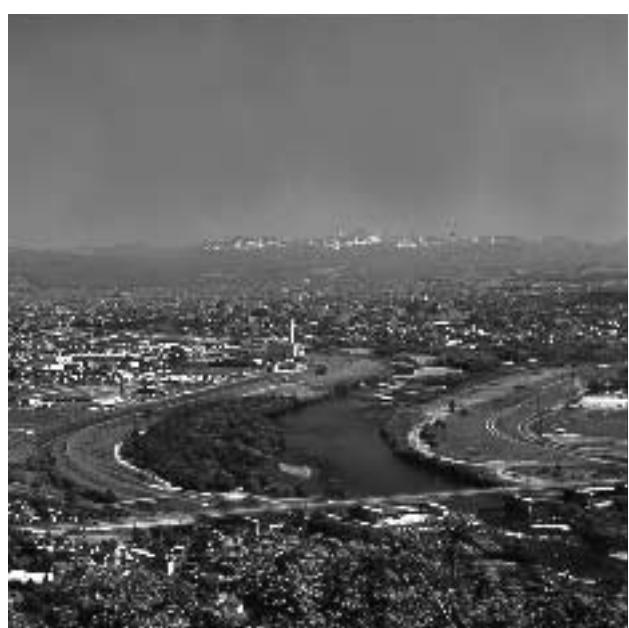
川のまち・橋のまち

旭川は、石狩川・忠別川・牛朱別川・美瑛川の4つの河川と、その支川が織りなす景観が特徴的な地域性を生み出しています。川は今まで多くの改修をしてきましたが、その景観は変わることなく続いています。

大雪山を遠景として、周辺に丘陵地を配した川のまちの景観は、季節によつていろいろな色に染まり、旭川市民の季節を計る時計の役割をしているのかも知れません。

北海道の三大名橋（豊平橋・幣舞橋・旭橋）のうち唯一当時の形を残す旭橋をはじめとして、旭川大橋、忠別橋、北旭川大橋、近文大橋、境橋など多くの橋が旭川の景観をつくっています。

明治23年に旭川（現在の東旭川地区）・永山・神居の3村が設置されました。翌24年、永山村に、翌々25年に旭川村に屯田兵が入植しました。その当時、現在の旭川中心部は草木が鬱蒼とした原野でした。第二次世界大戦終結後の昭和の大合併により東旭川は旭川市の一部になります。そのころには旭川も徐々に発展していき東に延び東旭川とぶ



つかりますが、旭川の区画割と東旭川の区画割は角度が違つていました。旭川は市街地、東旭川は農業の植民区画で、現在の23丁目付近から豊岡にかけての地域でぶつかりました。現在、道路も建物も右を向いたり左を向いたりしていますが、これも一つの歴史なのかも知れません。

かつて旭川も数多くの水害によって甚大な被害を受けてきましたが、昭和52年に完成した大雪頭首工などの護岸・築堤によって、今はようやく川に安心と安全が訪れて、不安を感じない時代になりました。

樺戸集治監

●月形町 ●月形町

の乱など)が全国各地で起き、多数の国事犯・重罪人が出たため、明治新政府は、収容する施設を早急に整備する必要に迫られました。そこで当時未開の地であった「北海道」を流刑地として囚人を送り込めば、反政府の危険分子を隔離することができます。農耕に使役して食糧を自給自足すれば経費負担の軽減になるとして、明治13年に伊藤博文・内務卿が北海道に調査団を派遣しました。



内務省の職員8名が北海道の3カ所、羊蹄山麓、十勝川流域、シベツブト(現在の月形・アイヌ語で川が合流するところ)を調査して、最適地の検討をした結果シベツブトに決定します。理由は第一に石狩川が交通手段として使えること、第二に背後にヒグマの棲息する樺戸の山々があることと民家のない密林地帯で、脱走の恐れがない自然の要塞であること、そして第三に肥沃な大地があり農耕に適していることでした。初代典獄(所長)となる月形潔一行は、江別から石狩川を遡

り、札幌から3日がかりで目的地のシベツブトに到着しました。

明治14年、東京・宮城に統いて全国で3番目、北海道では最初の集治監「樺戸集治監」が、収容者数1,500人規模の農事監獄として始まります。それは空知管内で最初の村・月形の誕生でもありました。

明治13年5月5日に書かれた月形典獄図誌に月形を語つた一文があります。

「西北に山を負い、東南に大河を帶び、原

農業をするなら、ここが北海道で一番良い所と言つても偽りではない、という意味です。鉄道も飛行機もない時代、この地への交通路は、石狩川といつ「道」だけでした。人を運ぶのも、食べ物を運ぶのもすべて石狩川を使った舟によるものでした。

月形典獄の「北海回覧記」にも、石狩川という道があつたから樺戸集治監をここに置いた、と記されています。

もしも月形に石狩川が流れていなかつたら、月形の町ができるのが、30年から50年くらいは遅くなつたのではないか、と言われています。

樺戸集治監は後に北海道の大動脈となる上川道路(現在の国道12号線)の開削に尽力し、屯田兵や移民の入植を可能にした功績はとても大きなものでした。

野広遠甚だしき高低なく、しかして地味もまた極めて肥沃なれば、この耕農のわざを興す場合、この地をもつて北海道大地と称するも、あえて不毛の原といふべからず」。

西北の山とは増毛連峰、東南の大河とは石狩川のことです。山があり、石狩川が流れ、土地が広々としていて、土壤も肥えている。

農業をするなら、ここが北海道で一番良い所と言つても偽りではない、という意味です。鉄道も飛行機もない時代、この地への交通路は、石狩川といつ「道」だけでした。人を運ぶのも、食べ物を運ぶのもすべて石狩川を使った舟によるものでした。

月形典獄の「北海回覧記」にも、石狩川と

いう道があつたから樺戸集治監をここに置いた、と記されています。

もしも月形に石狩川が流れていなかつたら、月形の町ができるのが、30年から50年くらいは遅くなつたのではないか、と言われています。

樺戸集治監は後に北海道の大動脈となる上川道路(現在の国道12号線)の開削に尽力し、屯田兵や移民の入植を可能にした功績はとても大きなものでした。

須部都川

●月形町 ● 石狩川を語るつどい



樺戸集治監の近くを流れる石狩川の支川・須部都川には、昭和の初めには堤防がひとつもなく、川の中にはアユやウグイ、アカハラ、ヤマメがいっぱい泳いでいました。昔の樺戸の町は駅前通り、須部都橋通り、樺戸神社のあつた裏通り、消防署の前の通り、本監通りなどと呼んでいて道路と川の間には広い畑や農地や崖がありました。その崖には今ではなかなか見ることができないカワセミがたくさん生息していた非常に清らかな川でした。

須部都川は子どもたちの大切な遊び場でもあって、泳いだり魚釣りを楽しんだり、のどが渴いたら川の水を手でくつて飲んだりしていました。この時代は、大勢の子どもたちが一緒に遊び、上級生は年下の子どもたちの面倒を良く見ていました。

石狩川にかかる吊り橋ができる前まで月形では渡し船が対岸への唯一の交通手段でした。その船頭をしていた人やお年寄りは「石狩川の主はサメなんだよ」と話していました。サメとはチョウザメのことでした。この川を渡るときには、大きなチョウザメの背びれが見えるくらいたくさんいたと語っています。石狩川には現在博物館に剥製として残されているような大きなチョウザメが悠然と泳いでいました。

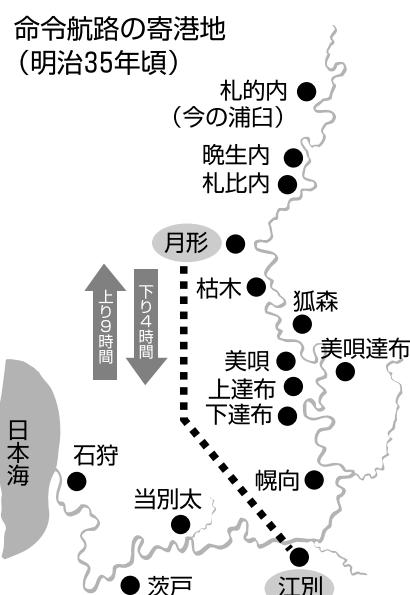
また明治40年頃、樺戸集治監には馬の蹄鐵を打つ授業手という人がいました。当時は看守が使う馬や、農耕馬がたくさんいました。熟練を必要とされる仕事だったので、看守の給料が9円のときに、25円ももらっていたそうです。

まことに活躍した船が上川丸(62トン)と、空知丸(35トン)です。船の姿を見なくても大きな上川丸が重量感のある「ボー」、それより小さな空知丸がかん高い「ピー」という汽笛の音で区別できました。

石狩川を遡る江別から月形までは9時間もかかったのに對し、下りの月形から江別まではたった4時間しか、かからなかつたそうです。

陸路がまだ未発達のころは川が主要な交通路でした。明治17年に石狩～樺戸(月形)間の運航が開始されました。その後明治24年には江別～樺戸間が空知太(現在の砂川)

この月形～江別間の航路はいつも満員とは言えず赤字が続きましたが、明治35年からは「北海道府命令航路」となり、国からの補助によって運航され、人々の大切な足として活躍したのです。



栗山のはじまり

栗山は、ヤム・ニ・ウシ（アイヌ語で栗の木の繁茂しているところの意味）に由来します。栗山のはじまりは角田村でした。その名前の由来は、仙台藩の支藩、角田藩から付けられたものです。

明治の初めに角田藩士・泉鱗太郎は東北を後にして蝦夷地に入りました。角田藩は戊辰戦争に敗れ、賊軍となつたため石高も3万3千石からたった58石に、領地も大幅に召し上げられてしまいます。鱗太郎たちは新天地・蝦夷地を目指しました。明治20年、開拓団のなかで話し合いが持たれ、「夕張開墾起業組合」という株式会社を設立し、明治21年に鱗太郎が社長となり、栗山の地を開拓に入ります。

5月3日、鱗太郎ほか2名が先発隊として室蘭を出発し、5月7日に一行は夕張川の向かい側に到着しました。ここから夕張川を渡るために、そこに住んでいたアイヌのテッピリアこと「下夕張鉄五郎」の丸木舟を使う予定でした。しかし川は増水期で渡ることができそうもありません。仕方なく本隊の

到着を待つことになり、5月11日に22名の本隊が着きましたが、まだ川は渡ることができない状態ではありませんでした。渡れるようになるまでの間、鱗太郎たちは狭い小屋には入りきれず、夕張川の河畔にむしろやござを敷いたり、張りめぐらせて野宿をして川の水が落ち着くのを待ちました。

いよいよ16日朝、丸木舟で川を渡のですが、舟が小さいので一人ずつしか渡れず、しかも川はまだ流れが速いために上流から下流に流されてしまいます。テッピリアは幾度も

川を往復し、25名全員が渡り終えたのは午後2時頃でした。

ようやく川を渡り終えた一行は、現在の阿野呂川左岸（現在の角田）に上陸しました。現在の開拓記念公園の向かい側あたりに小屋がけをして、夕張開拓の第一夜を屋根のある場所で過ごしました。ここに落ち着いて、まわりを焼き払い、種を播くことから始めたこの5月19日が、栗山の開拓記念日になっています。同じ時期にアノロ川の南側やウエンベツ川の北側にも入植者が入り、栗山は徐々に開墾が進められました。

その数年後の明治26年に鱗太郎たちは試

験的に稻作を行い、収穫に成功したため、稻作の気運が一気に高まり水利組合を設立します。最初はアノロ川から取水していましたが、予想外の収穫に夕張川からも用水路を引くようになり、水田の耕作面積は広がっていきました。このような努力の結果、当時「角田米」として全国に名前が知られるまでになりました。

明治23年に角田村ができ、昭和24年の町制に伴い「栗山町」に改称し、平成20年に開基120年を迎えました。



●栗山町●

つどい

語る

石狩川

栗山町

石炭と砂金

昭和20年代は、人々の暮らしは豊かとはいえないませんでした。夕張の炭鉱で選炭した後の粉が流れてくるので、冬を迎える季節になると夕張川へでかけ川岸を掘り、石炭の粉をスコップですくい、箕みのに入れ川で洗つたあと、かますの袋に詰めました。それを何度も何度も繰り返し、冬の暖房の燃料にしました。千鳥が滝は冬になると雪が積もって渡れるようになるので、夏に流木を集めて適当に名前を書いて岸辺に積んでおきます。犬ぞりを引いてそれを運んできて、それをのこで切つたり、おので割つたりして薪きなとして利用していました。

夕張の千鳥が滝付近をはじめ夕張川は砂金掘りが盛んに行われていました。夕張の砂金掘りの歴史は古く、最初は江戸時代よりもっと前の時代からで、その後江戸時代以降には一攫千金の夢を抱き夕張川へ、



そして昭和初期にも砂金ブームが訪れました。昭和初期は主に白金はつきんを探りました。白金を使う目的は、戦争に使う銃の弾丸です。現在はダイヤモンドなどを使うのですが当時は白金でした。その名残として白金の沢という地名があります。普通の砂金がある場所は川が赤く見え、白金のある場所は白く見えたといいます。砂金を掘つたときに出る砂利を支流に埋め、ウグイの産卵場所を作り、集まつたウグイを投網とあみで捕つて食料にしていました。

むかし夕張川は、石炭採掘さくくつを行つていたのでいつも黒い色をしていましたが、現在は石炭の採掘をしていないので色もきれいで、場所によつてはブランケットなどが豊富なため、いつも緑色をしていて、ウグイやドジョウやカワエビなどが多いといいます。

ハサンベツの活動

平成19年までに水辺での体験学習には流域の子供たちおよそ1,500人が参加しました。川に連れて行き、魚釣りをしたり、ボートに乗つたり、川流れを楽しみます。そこには嬉しそうに輝く子供たちの顔があります。これからも、子供たちと一緒に、地域の歴史や川の文化、里山の文化を次の世代に伝えていくことが、川とともに生きることではないかと考えて活動しています。



植樹



森と川の勉強会

むかしの千歳川

● 恵庭市 ● 石狩川を語るつどい
大正時代、昭和天皇がまだ若く、大正天皇の名代の攝政の宮だつた頃北海道に初めて来道されました。当時現在の郷土資料館の場所にあつた高等科の生徒たちを奉拝に札幌まで連れていくつてくれるこことなりましたが、札幌まで歩くと1日もかかつてしまします。そこで学校に集り8kmの道のりを千歳川の船着場まで行き、船で江別まで千歳川を下り、江別からは汽車に乗つて札幌まで行くことになりました。

その当時の千歳川は、非常に曲がりくねつて水量も多く、川幅も今の倍以上もありました。その岸にはヤナギやハンノキなどが鬱蒼と生え、枝が川面まで下がっていました。その葉にいる虫を食べるためにはイトウやコイが飛びつくという素晴らしい情景が見られました。広い川に千歳の方に生活資材や木炭などを運ぶ大きな船が白い高い帆を揚げて通り、すれ違うときに船頭さんが「おい、おまえらどこ行くんだ」と気軽に声をかけてくれ、私たちが返事をすると、「楽しんでもいいよ」といつてくれるのどかな時代でした。

大正時代、昭和天皇がまだ若く、大正天皇の名代の攝政の宮だつた頃北海道に初めて来道されました。当時現在の郷土資料館の場所にあつた高等科の生徒たちを奉拝に札幌まで連れていくつてくれるこことなりましたが、札幌まで歩くと1日もかかつてしまします。そこで学校に集り8kmの道のりを千歳川の船着場まで行き、船で江別まで千歳川を下り、江別からは汽車に乗つて札幌まで行くことになりました。

その当時の千歳川は、非常に曲がりくねつて水量も多く、川幅も今の倍以上もありました。その岸にはヤナギやハンノキなどが鬱蒼と生え、枝が川面まで下がっていました。その葉にいる虫を食べるためにはイトウやコイが飛びつくという素晴らしい情景が見られました。広い川に千歳の方に生活資材や木炭などを運ぶ大きな船が白い高い帆を揚げて通り、すれ違うときに船頭さんが「おい、おまえらどこ行くんだ」と気軽に声をかけてくれ、私たちが返事をすると、「楽しんでもいいよ」といつてくれるのどかな時代でした。

明治40年ころに、市役所の近くに木工場を造ることになり、重い発動機とか資材を運ぶのには陸よりも千歳川を利用しよう、ということになりました。千歳川の船着き場から陸揚げし、機械の移動のために木のレールを2本作り、その上に乗せて大勢の人があとで少なくとも13kmの距離を相当な時間をかけて運んだそうです。

また朝方に自転車のハンドルに地面につくほどのイトウを4匹もぶら下げた人が、「おれは千歳川にイトウを養つているのだ」と言って大笑いしていました。千歳川には今では幻の淡水魚と言われるイトウをはじめ、いろいろな大きな魚が生息していました。

一つ、内地で米を食べていた者が移住後、ほかの食物に代わるのは困難であり、米を買うにも乏しく、交通不便で容易に求められず

二つ、内地において米づくりに幾分経験を持つていること

三つ、湿地が多く、畑作に適さぬため、水田にしたいこと

四つ、市場作物をつくるより、米をつくりて、みずから食し、また長く貯蔵することができる」と

五つ、冬長きため、一水の酒をもつて寒さをしのぐ習慣ありしも、交通不便にして、酒安からずをもつて、自家用酒を醸造するため、米をつくりたき」と

米づくりと還元水利用

当初、開拓使がとつた方針は、ケプロンの指導による畑作、畜産を中心とした大規模な米国式の農業で、北海道には稻作は向かないとして禁止していました。

しかし開拓民は米づくりに対する願望を強く持っていました。ある手記が残されています。

一つ、内地で米を食べていた者が移住後、ほかの食物に代わるのは困難であり、米を買うにも乏しく、交通不便で容易に求められず

二つ、内地において米づくりに幾分経験を持つていること

三つ、湿地が多く、畑作に適さぬため、水田にしたいこと

四つ、市場作物をつくるより、米をつくりて、みずから食し、また長く貯蔵することができる」と

五つ、冬長きため、一水の酒をもつて寒さをしのぐ習慣ありしも、交通不便にして、酒安からずをもつて、自家用酒を醸造するため、米をつくりたき」と

五つ、冬長きため、一水の酒をもつて寒さをしのぐ習慣ありしも、交通不便にして、酒安からずをもつて、自家用酒を醸造するため、米をつくりたき」と

● 恵庭市 ● 石狩川語るつどい

六つ、わら、縄、わらじ、わら靴、むしろ、かますなどを貯わんとするも、容易に求めがたくみずから米づくりをなして、その副産物のわらをもつて、これをつくらんこと

恵庭の米づくりは明治20年ごろから試作が繰りかえされました。上流から水を引こうという話が起き、明治24年に漁川から水を引く権利を得て、盤尻用水組合が設立され、36haが開田されたとの記録が残っています。共同用水組合を組織しての米づくりは、石狩平野で最初かもしません。

昔は取水量が限られていて水量の増加が望めないので、一度水田に利用した水を下流で再利用するため、幹線排水路に水門を設置して堰き止め、用水路に流し込む「還元水利用」という方式をとっていました。米づくりにかけた先人の知恵でした。

5月の中・下旬に上流域で田植えが始まわり、6月の初旬には中流域で、下流域では6月10日過ぎに水が流れてくるまで田植えができませんでした。

「手間替え」と言って、先に田植えをする親戚などの家に手伝いに行き、後で自分の家の田植えに手間返しに来てもらうという労

なわ

働力の交換が行われていました。お昼にはごちそうを振る舞い、農家の交流の機会でした。

昭和40年ごろ、揚水機での取水方式が採用され、堰き止め方式になります。そのころは農作業の全てが手作業で、やがて馬に代わり耕運機からトラクターとなり、手作業から機械化に変化していきました。今では作業の主役だった馬もいなくなり、馬具店や蹄鉄所も姿を消して、馬小屋さえ見られなくなりました。

漁太の番屋

『再航蝦夷日誌』に、松浦武四郎が江別から千歳に向かつて船で千歳川を遡つていく道中の様子が克明に記されています。

恵庭の漁太へ立ち寄った際に「漁太番屋の図」の中で、「漁太には大きな番屋がある。ほかに弁天社、蔵、作業小屋などがあり、アイヌの人たちの家が五、六軒ある。子熊や鷺を飼い、インゲン豆、大豆、稗、粟、黍、馬鈴薯をつくつていて、鹿を干した肉やヒシの実を食料とし、鹿の皮を着ていた」と昔の恵庭の様子が書かれています。



この番屋は恵庭神社の遙拝場跡地にちょうど重なるような形で建てられていたことが分かりました。今は石碑と鳥居が残されている場所ですが、おそらく江戸時代から千歳川の水運の拠点として栄えた場所だつたのでしょうか。

伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』やその弟子の間宮林蔵の『蝦夷図』には海岸線を中心とした地名や川が記されている中で、内陸部の千歳川や漁太、漁川、シママップ川などが正確に描かれています。

最初に入つた和人

●三笠市● 石狩川を語るつどい
三笠は、石狩川から幌向川、そして幾春別川に入り市内を縦貫して桂沢に至る川筋に位置します。縄文人やアイヌの人たちもこのルートで入つたと思われますが、最初に三笠に足を踏み入れた和人はそれとは違うルートでした。およそ250年以上前に夕張川から幾春別岳の麓に入つたのが江戸時代の材木商・飛騨屋久兵衛です。飛騨屋久兵衛は松前藩から蝦夷地の伐採の権利を得て、当時エゾヒノキと呼ばれ大変重宝されたエゾマツを伐採して江戸や大阪に送っていました。商才に長けていた飛騨屋久兵衛は、切り出した木材の長さや太さを規格化して寸法を揃えて出荷していました。作業も伐採、搬出、造材と分業化し、賃金も前払いするので熟練の作業員が集まります。170~180人のチームを組み現在の有珠あたりに上陸して、案内をアイヌに頼み、苦小牧から勇払川を遡り、美々川へ入ります。さらに遡つて支笏湖を通り千歳川から夕張川へ出て、夕張太から夕張山地に入り幾春別岳のふもとまで来ました。幾春別川の源流域で伐採し

三笠は、石狩川から幌向川、そして幾春別川に入り市内を縦貫して桂沢に至る川筋に位置します。縄文人やアイヌの人たちもこのルートで入つたと思われますが、最初に三笠に足を踏み入れた和人はそれとは違うルートでした。およそ250年以上前に夕張川から幾春別岳の麓に入つたのが江戸時代の材木商・飛騨屋久兵衛です。飛騨屋久兵衛は松前藩から蝦夷地の伐採の権利を得て、当時エゾヒノキと呼ばれ大変重宝されたエゾマツを伐採して江戸や大阪に送っていました。商才に長けていた飛騨屋久兵衛は、切り出した木材の長さや太さを規格化して寸法を揃えて出荷していました。作業も伐採、搬出、

たエゾマツは、川沿いの谷間に集めておいて、春の雪解け水で増水したときに一気に川を流送させ、途中の川でイカダを組んで幌向太や江別太に集めます。最後にそれを石狩河口の木場に集約して江戸や大阪に運んでいました。

その後、飛騨屋久兵衛は志利別、沙流、厚岸など各地の山の伐採も任されるようになります。さらに厚岸、霧多布、宗谷などの場所請負や札幌十三場所の下請負も手がけて

いきます。この木材伐採などの事業で飛騨屋久兵衛は巨万の富を得て、この後4代、90年に渡つて豪商の名を欲しいままにしますが、使用人の裏切りや松前藩の財政再建のための場所の取り上げなどが起こります。

また、アイヌ語の地名の中で「プト」というのがありますが、これはアイヌの人たちが狩りをするために川を遡るときに、大きい川から小さい川への入口には必ず「プト」と名前を付けたようです。幾春別川から幌内太とか、江別太、空知太、幌向太など各地にあります。

三笠の地名

松浦武四郎が蝦夷地の探検で石狩川を遡った安政の頃には、幾春別川の入口になる幌向川の河口は立木などが詰まっていて入ることができませんでした。アイヌの案内人から上流に市来知(イ・チキル・ウシ・イ)という

地名があると聞き図面に記しています。

三笠の一帯は熊の足跡の多いところの意味で「イ・チキル・ウシ」と言われていて、明治15年にこの名前をとつて市来知村が出来ました。また幾春別は幌内太のアイヌが、かなたの川という意味で「イ・クシ・ウン・ペツ」呼んでいました。

いたと言われ、明治20年に「幾春別村」が誕生しました。幾春別川の支流の名も、ほとんどアイヌ語で付けられています。

アイヌの人たちは海から川に入つて川を遡るという感覚があるので河口は入り口になります。逆に和人は川が流れて海に注ぎ込むと考えるので河口は出口になるわけです。狩猟民族であるアイヌの人は、川を遡つて山や川に入り、農耕民族である和人は、川上から土砂が流れてきて肥沃な土地ができ、それを耕すという観念があつたようです。

華やかなころの幾春別

当時の幾春別は北炭幾春別鉱、住友奔別鉱、東邦弥生炭鉱と3つの山に囲まれており、賑やかなことは言うまでもなく、幾春別市街には飲食店から娯楽施設まで合わせて40軒ほどあり、夕方になると3つの山から鉱夫たちが下りてきました。当時人気だったのがカフェという酒場で、ハイカラな名前なので子供のときにカフェ、カフェと呼んでいました。

若い人们は奔別からでも川向からでも背広をビシッと着て、頭にポマードをピッとして革靴を履いて来ました。カフェからはレコードの音楽がどんどん流れ、料理屋からは三味線の音が夕方からチンチチンと流れるという華やかな時代がありました。

お祭りになると神社の縦横にびつしり露語るつどい店が建ち並び、境内はきれいな電飾やぼんぼりで飾られ、いろいろな催し物がいっぱいあり本当に楽しいところでした。近くには見せ物小屋も出され、花火もドンドン打ち上げられました。

お正月には各商店の初荷が馬そりに乗せられて、ガンガン音をたてながら気合いをか

けて運んでいました。

そのころの小学校は、3つの炭鉱から幾春別小学校に通っていて、それはそれはもう賑やかでした。現在の幾春別小学校は28名だそうです。当時は全校で3,600人もいました。

子供たちは、奔別川と幾春別川の合流している地点でよく泳いでいました。近くのいい

場所は炭鉱の子供たちの特権でした。やんちやな子は少し離れた温泉のあるほうまで行くのです。そこまでには3つの閑門があります。1つ目は森林鉄道の鉄橋を渡ることですが、枕木の上に敷いてある板を素早く渡つて行くことです。2つ目はそこから1mくらい行ったところにいるべじです。この閑門がひと苦労で、ズボンに石ころを入れて、木の棒を

ます。100mくらいで泳ぐ場所があり、そこに行けば友達がいっぱいいました。すぐに支度をして、耳にツバを入れて、胸に川の水を形式的にドボンと川に入れます。疲れると大きな岩の上で甲羅干しをしながら休みます。大きなアブが寄つてくると懸命に追い払います。それから何度も泳ぎ、帰り道を凱旋してくるのです。

魚染の滝は明治22年に蛇行する幾春別川の改修工事中に豪雨があり一晩で偶然出

來たもので、現在では両岸に木々が生い茂り幾春別川を代表する景勝地になっています。

豊かな流れに魚が群がる様子からその名が付いたと言われていますが、滝の脇には龍神様が祀られています。



むかしの長沼

長沼の開拓は吉川鉄之助が明治20年に

現在の北長沼に入植したのが始まりです。

長沼のあたりは昔から何回も洪水を繰り返し、そのたびに土砂が流れ出て少しづつ川の縁が高くなつていき、自然に堤防が出来てきます。そういうところがいい畠地になりますが、世界の四大文明のナイル川もインダス川もそうです。みんな大きな氾濫を繰り返すことでのいい土地になつてきます。洪水と肥沃な土地は切つても切り離せない関係にあります。そこで最初に入植地になつたのが夕張川の北長沼でした。

この頃アイヌの人たちは秋になると、南の方の舞鶴あたりに来てサケを捕つたり、シカ猟などをして暮らしていました。明治20年代後半に植民区画といつて、道庁が土地を分け与えることで、その中にはアイヌの人たちも含まれていました。道庁が未開地の貸付をするために村の中央に線を引き、これを基線として東西に、または南北に零号を中心としてそれ三百間間隔の号線で区画していました。北長沼に入ったグループと南

の方には千歳などから幌内のあるあたりに入つた入植者、アイヌの人たちのグループとに分かれ開墾が始まりました。

「舞鶴」という地名は古い地図にも書かれていて、少し南に「繁殖」という地名もありますが、明治30年代には長沼に丹頂鶴がたくさんいたことから舞鶴という名が付けられました。長沼には他にも「木詰」「フシコ」など昔の状況を想像させるようなアイヌ語の地名が数多く残されています。

馬追運河

原野の排水と千歳川経由の水運を目的に旧夕張川までの10kmを開削した馬追運河は明治29年に竣工し、当時は江別までの運搬路としても利用されていました。

子供の頃の馬追運河は今のように浅くなく、大体首ぐらいまでの深さがありました。むかしは大きな穴が川の縁にずらつと並んでいましたが、そこには川ガニが棲んでいて、子供の頃には友達などと獲るのがいちばんの楽しみでした。今のようにきれいなボリバケツではなく、1斗やそれ以上入るブリキのど

ついガンガンに、ぱっこを1本持つて川に飛び込んでいました。橋も今みたいに立派なコンクリート橋でなく木橋でした。



みんな相当なやんちゃ坊主で、その橋から川に飛び込んでは泳いだり、カニの穴に手を突っ込んでバケツいっぱいにカニを捕つてきました。普通のカニは足を入口に向けているのですが中には、はさみを入口に向けているカニもいて手を何回も噛まれることもありました。干してあつた身欠きニシンを持つてきてエサにする子供もいました。秋になると畑に植えてあるトウモロコシを糸でくくつて川の中に入れると、カニがいっぱい群がつて連なつて釣れたぐらい魚もカニも長沼の川にはたくさんいました。

今でも長沼中央小学校では授業の一環として山根川に「ざこ」とりに行きます。何が採れるかというと昔ほどはいませんが、カニや川エビ、ドジョウなどです。中にはつわものがいてフナをつかまえる子もいます。

今は見ることでできませんが、昔は馬追沼という大きな沼がありました。当時の中学校が炊事遠足に利用する場所でした。その近辺の高台に馬を放牧しに行つたとき、沼に大きなコイが何匹も泳いでいるのを見つけ堆肥たいひをすくう時に使うフォークで捕らうとするのですが、返しもないで思うようにはいかなかつたようです。

昭和5、6年頃いまの西5線のあたりに変な動物が浮いたり沈んだりしているので近くに寄つて見るとオットセイでした。驚いて動物の専門家に聞くと、石狩川では江別の火力発電所の排水口あたりまで1匹程度オットセイが今でも現れるそうです。

●長沼町●
西長沼は長沼の表玄関口ですが、水害に襲われることが多い場所でした。昭和37年、40年、50年、56年と頻繁に水害に襲われました。そこは海拔かいばく6m70cm程しかなく、当時は管理道路もないで築堤を作りましたが、

当時の築堤は7m80cm程度でした。排水機場は秒速30トンという能力を持ついましたが、千歳川が満水になると機械が全部ストップされるので水の行き場所がなくなり、馬追運河に入りする河川も多いため、ものすごい量の水があつという間に噴出ふんしゅつしてしまいます。水害で苦い思いをした人はその後、家を建てる時にはその当時の苦労を思い出して、床面を地面より2mくらい高くするようになりました。

こども水防団

最近ゲリラ豪雨や集中豪雨が増えていますが、いろいろな現象から水防への意識が高まっています。そこで「川塾」では、子供たちに水難事故防止の観点から「こども水防団」として、水害や気候変動を想定した訓練などを行っています。具体的には、夕張川・北長沼の水郷公園で水防団の訓練をしますが、最初に濁った川の水の中を歩きます。

「こども水防団」では水害時の訓練だけではなく、保水効果を高めるために植樹をしたりカヌーに乗つて遊んだり、川と親しむ活動も行っています。「こども水防団」の活動は、「北海道川の日ワーキショッピング」で2年連続でグランプリを受け、全国大会でも準グランプリ賞を獲得しています。

が分かります。それでは何がいいのか試してみます。素足すあしだといろんなものを踏んで危険ですが、運動靴なら歩きやすい。そんなことを体験します。水害のときに用水路があふれたり、深みがあつたり、マンホールが浮いて危険な状態などを想定して、棒を持って歩く訓練をして、人間が安全に歩ける水の深さを覚えます。命綱とライフジャケットをつけて実際に深いところで流される体験もあります。本当に流されではないのですが疑似体験を通して体感してもらいます。「川塾」の子供たちは年々熟練してきました。水害時の避難経路をどう選んだらいいかを地図上で考えてから実際に歩き、水面が橋に近く必ずしも近道が最善でないことなどを体験します。

「こども水防団」では水害時の訓練だけではなく、保水効果を高めるために植樹をしたりカヌーに乗つて遊んだり、川と親しむ活動も行っています。「こども水防団」の活動は、「北海道川の日ワーキショッピング」で2年連続でグランプリを受け、全国大会でも準グランプリ賞を獲得しています。